

# 一人づつ深淵の中へ

ニキフォロス・ヴレタコス 作

岡野 純 訳

私の親しい友が次のような話を語ってくれた、私はそれをそのまま書きつける。

「……それは雨の降る晩だった。クリスマス前夜のことだ。真夜中にわが家の扉を叩く者がいる。僕は不安を感じた。人の行き交う時間は過ぎていた。ただごとではあるまい。その頃われわれは、日毎夜毎、何がわれわれを待ち受けているか誰もわからなかった。そして果たせるかな。天井につかえんばかりの背の高い1人のドイツ人が家の中に入ってきたのだ。妻は僕のうしろで藁のように震えていた。ドイツ人はさらに一歩足をふみ入れた。

——クリスマスツリーはどこにある？ と男は訊ねた。そしてポケットの中から小さな玩具を取り出した。

——クリスマスツリー？ そんなものはない、と僕は答えた。われわれは貧乏だ。クリスマスツリーなんてない……

兵隊は頭を挙げて、半開きの戸から、寝かしつけてあったわれわれの子供の寝台を眺め、片手に濡れた軍帽を持ってその方へ進んでいった。まっすぐ立ったまましばらく子供を眺め、それから子供の髪の毛をそっと撫でながらその傍に横になった。5分が過ぎた。僕と妻とは戸のところに立って待っていた。10分が過ぎた。兵隊のいびき声が聞えてきた。妻はわれわれの寝台から毛布をとってきて、爪先で歩いて行ってそれを掛けてやった。それからわれわれは黙ったまま腰をかけていた。

——わたしたち、みんな人間ですわ。と彼女は言った。よく考えてみて下さい。わたしの言うことおわかり？ あの兵隊のために、できることなら、あの人も人間なんですから、クリスマスツリーを買ってきてあげたら……

僕は僕なりに思いをめぐらしながら彼女をみつめた。

——いいや、と僕は言った。沢山の同胞が捕えられ、また多くの者が食べるものもなしに野戦で戦っているんだ。それなのに……まあ言うまい。われわれはみんな人間だ。それは俺だって知っている……

翌日、日が暮れようとする頃、僕の家に来たあのドイツ兵のカロロスが街角で僕を待ちうけていた。われわれはマスタックの並木の下を肩を並べて歩き、一杯飲みに出かけた。はじめは2人でテーブルについていたが、やがて僕の友人が2人加わった。カロロスはドイツの民謡を声低く歌い、彼の両眼は露に濡れた百合のように輝いた。彼が歌いおえたとき、僕の友人の1人が菩提樹を歌いはじめた。カロロスはそれに耳を傾け、つきつぎと杯を重ねた。

——おい、カロロス！ と僕の友人の1人が言った。こんどいつか俺たちがラインに行ったときには、お前さん、俺たちに葡萄酒をご馳走するだろうな、これよりもずっとうまいのを……

僕は一瞬、目がくらみ、何が起こったのかわからなかった。カロロスがすっと立ち上り、僕の友人に平手打ちをくらわせるのが目に入ったのだ。

——お前たち、ラインなんか決して来られはせん！ と彼はテーブルの上に唾をとばしながら

僕の友人に言った。

僕はさっと立ち上がり、カロロスの両腕をつかまえ、落着かせようとした。彼はぐいと身体を動かし、腰からピストルを引きぬいて僕の胸にそれをつきつけた。だがすぐに次の動作でピストルをケースにおさめた。そして、目の前にあった椅子を蹴とばし、急ぎ足で扉を開き、姿を消した。彼が走り去るとき、彼の怒った眼から一にぎりの火花が食堂中に飛び散るように僕には思えた。われわれは棒のように硬くなって席に坐ったまま、声をなくしたかのように顔だけを見合わせていた。手は萎えてしまっていた。葡萄酒をなみなみとついで杯を残したまま、黒い襟を立てて、われわれはつぎつぎと扉を排し、とび込むように闇の中へ、深淵の中へと1人づつ姿を消して行ったのだ。》

す

## ニキフォロス・ヴレタコスについて

Nikiphoros Vrettakosは1911年にスパルタ南方のクロケア村で生まれた。ごく若いときから特異な詩的天分を示し、イシオンのギムナシオンの生徒のとき、すでにいくつかの詩を作った。アテネに出て法律を学んだが、かたわら詩作にふけり、それらを「影と光の下に」と題する処女詩集として1929年に出版した。その後、多数の詩を定期刊行物に掲載し、また詩集にまとめて世に出した。人間的情感と問題性にと富むと言われる彼の詩は、英・仏・露・独・伊その他の言語にも訳され、シケリアノス、カザンツァキス、セフェリスなどと並ぶ現代ギリシア屈指の詩人と彼は目されている。散文作家としては余り名をなしていないが、上に訳出したものは彼の多くはない短篇小説の代表作の1つであるのだろう。この中で作者は何を言わんとしているのか、——第2次大戦下、ドイツ軍の占領下にあったギリシア民衆のみじめな立場をか、あるいはむしろ占領軍人の心の奥の悲哀をか、さらには「1個の人間」が、民族・階級そのほかさまざまな「集団の中の人間」となったとき（それを意識したとき）、人間の中に生じるやるせない疎外・被疎外の深淵をか——あれこれと考えさせてくれる小品ではある。（J. O.）

## 教育実習の思い出

随 木 幸 恵

6月に中学、高校で2週間、実習をした。中2を2時間、中3を1時間、高1のグラマーを1時間、高2リーダーを2時間、高3リーダーを1時間、計7時間の授業を受け持った。実習をする前に、付属の生徒は教生いびりがじょうずだといううわさを耳にしていたので、授業するのが、少し恐ろしかったが、生徒の方は、彼らと年のあまりちがわない我々実習生の未熟な授業を、年行事の1つとでも考えているらしく、楽しんでいる様子であった。高2のあるクラスでは、授業時間中、先生が出張のため教室を出て行かれるとすぐ、「質問があります。」と言って、1人の生徒が手を